

六浦

左阿弥作

前
ワキ
シテ

都の僧
里女

後
ワキ
シテ

前に同じ。
楓の精

地は
季は

武蔵
九月

「思ひやるさへ遙かなる。く。東の旅に出でうよ。

「是は洛陽の辺りより出でたる僧にて候。我いまだ東国を見ず候ふ程に。此秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候。

「逢坂の。関の杉村過ぎがてに。く。ゆくへも遠き湖の。舟路を渡り山を越え。幾夜なくの草枕。明け行く空も星月夜。鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に着きにけり。く。

「千里の行も一步より起るとかや。はるぐと思ひ候へども。日を重ねて急ぎ候ふ程に。是は、や相模の国六浦の里に着きて候。此渡りをして安房の清澄へ参らうずるにて候。又あれに由ありげなる寺の候ふを人に問へば。六浦の称名寺とかや申し候ふ程に。立ちより一見せばやと思ひ候。なふく御覧候へ山々の紅葉今を盛と見えて。さながら錦をさらせる如くにて候。都にもかやうの紅葉

の候ふべきか。また是なる本堂の庭に楓の候ふが。
木立余の木に勝れ。唯夏木立の如くにて。一葉も
紅葉せず候。如何さま謂のなき事は候ふまじ。人
来りて候はゞ尋ねばやと思ひ候。

シテ詞

「なふく御僧は何事を仰せ候ふぞ。

ワキ詞

「さん候是は都より始めて此所一見の者にて候ふが。

山々の紅葉今を盛と見えて候ふに。是なる楓の一
葉も紅葉せず候ふ程に。不審をなし候。

シテ

「げによく御覧じとがめて候。いにしへ鎌倉の中納

言為相の卿と申し人。紅葉を見んとて此所に来
り給ひし時。山々の紅葉いまだなりしに。此木一
本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば。為相の
卿とりあへず。如何にして此一本に時雨れけん。
山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより。今
に紅葉をとゞめて候。

ワキ

「おもしろの御詠歌やな。われ数ならぬ身なれど

も。手向の為めにかくばかり。旧りはつる此一本の跡を見て。袖のしぐれぞ山にさきだつ。

シテ詞「あら有難の御手向やな。いよく此木の面目にてこそ候へ。

ワキ「さてく先に為相の卿の御詠歌より。今に紅葉をとどめたる。謂は如何なる事やらん。

シテ「実に御不審は御理り。さきの詠歌に預かりし時。此木心に思ふやう。かゝる東の山里の。人も通は

ぬ古寺の庭に。われ先だちて紅葉せずは。いかで妙なる御詠歌にも預かるべき。功成り名遂げて身退くは。是れ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ。今に紅葉をとどめつつ。唯常盤木の如くなり。
ワキ「是は不思議の御事かな。此木の心をかほどまで。しろしめしたる御身はさて。如何なる人にてましますぞ。

シテ「今は何をか包むべき。我は此木の精なるが。御

僧たつとくまします故に。唯今頭はれ来りたり。
今宵はこゝに旅居して。夜もすがら御法を説き給
はゞ。重ねて姿を見え申さんと。

地 「夕べの空も冷ましく。此古寺の庭の面。霧の籬の
露深き。千草の花をかき分けて。ゆくへも知らず
なりにけり。く。 (中入)

ワキ歌 「所から。心にかなふ称名の。く。御法の声も松
風も。はや更け過ぐる秋の夜の。月澄み渡る庭の

面。寐られんものかおもしろや。く。

後ジテ 「あら有難の御弔ひやな。妙なる値遇の縁にひかれ
て。二度こゝに来りたり。夢ばしさまし給ふなよ。

ワキ 「不思議やな月澄みわたる庭の面に。有りつる女人
とおぼしくて。影の如くに見え給ふぞや。草木国
土悉皆成仏の。此妙文を疑ひ給はで。なほく昔
を語り給へ。

シテクリ 「夫れ四季をりくの草木。おのれくの時を得て。

地「花葉さまざまの其姿を。心なしとは誰かいふ。

シテサシ「夫れ青陽の春の初め。

地「色香たへなる梅が枝の。かつ咲きそめて諸人の。
心や春になりぬらん。

シテ「又は桜の花盛。

地「唯雲とのみ三吉野の。千本の花にしくはなし。

クセ「月日経て。移れば変はる詠めかな。桜は散りし庭
の面に。咲きつゞく卯の花の。垣根や雪にまがふ

らん。時移り夏暮れ。秋も半になりぬれば。空
定めなき村時雨。きのふは薄きもみぢ葉も。露し
ぐれ洩る山は。下葉残らぬ色とかや。

シテ「さるにても。東の奥の山里に。

地「あからさまなる都人の。あはれも深き言の葉の。
露の情にひかれつゝ。姿をまみえ数々に。言葉を
かはす値遇の縁。深き御法を授けつゝ。仏果を得
しめ給へや。

シテ「更け行く月の夜遊をなし。

地「色なき袖をやかへさまし。（序の舞）

シテ「秋の夜の。千夜を一夜に重ねても。

地「言葉のこりて鳥や鳴かまし。

シテ「八声の鳥も数々に。

地「八声の鳥も数々に。鐘も聞ゆる。

シテ「明方の空の。

地「所は六浦の浦風山風。吹きしをり吹きしをり。散

るもみぢ葉の月に照り添ひて。唐紅の庭の面。明
けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思
へば木の間の月の。く。かげろふ姿となりにつ
り。